

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月24日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520176

研究課題名（和文） 古代から中世に至る真名表記テキストに関する表現と知の系脈
についての研究研究課題名（英文） The Genealogy of Expression and Knowledge in Japanese-made
Classical Chinese Texts from Ancient to Medieval Times

研究代表者

佐倉 由泰 (SAKURA YOSHIYASU)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70215680

研究成果の概要（和文）：本研究は、平安時代中期に成立した『将門記』、室町時代中期に成立した『大塔物語』をはじめとする、十世紀から十六世紀までに現れた数多くの真名表記テキストを考察の対象とし、往来物、古辞書、軍記物語等の関連する諸書も幅広く視野に収めて、テキスト間の用語、表現の類似、関連を詳細に調査し考究するというものである。その結果、真名表記をめぐる表現と知の系脈が、古代から中世に至る数百年もの間、日本の文化、学問の基底を支え続けたことを明らかにすることができた。成果は、報告書『大塔物語』をめぐる知の系脈』等にまとめて提示した。

研究成果の概要（英文）： Taking as its object numerous Japanese-made classical Chinese texts that appeared from the tenth to the sixteenth centuries, such as the *Masakadoki* from the middle of the Heian period and the *Ōtō Monogatari* from the middle of the Muromachi period, as well as related texts such as primers, old dictionaries, and war chronicles, my research investigated the similarities and connections in term and expression among texts. The findings clearly show that a genealogy of expression and knowledge continued to support the foundations of Japanese culture and learning for several hundred years, from ancient to medieval times. These results have been presented in reports such as *The Genealogy of Knowledge Surrounding the “Ōtō Monogatari.”*

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学・漢文学

キーワード：国文学、漢文学、表現史、文化史、学問史

1. 研究開始当初の背景

日本では、古代から中世に至る数百年もの間、真名表記をめぐる表現と知の系脈があた

かも伏流水のように息づき、継承され、文学、文化、学問の基底を支え続けてきた。が、この文化の深層に潜む表現と知の水脈は、従来

ほとんど注目されることがなかった。

研究代表者である私、佐倉由泰が、こうした真名表記をめぐる表現と知の重要性を認識したのは、『将門記』と『大塔物語』という二つの真名表記の軍記物語の重要性に注目したことに始まる。『将門記』は、十世紀に東国で起こった戦乱、平将門の乱を記述した、平安時代中期の書であるが、このテキストの重要性については、何年にもわたって考究を続け、『将門記』の表現世界」（『国語と国文学』第78巻第8号、2001年8月）、『将門記』を読む」（『国語と国文学』第82巻第5号、2005年5月）、「初期軍記の記述を支えるもの—『将門記』の用語に着目して—」（『軍記と語り物』第44号、2008年3月）等の論考において、記述の特質とその文学的意義、文化的意義を論じてきた。中でも、「初期軍記の記述を支えるもの—『将門記』の用語に着目して—」では、同じ十・十一世紀の真名表記テキストである『将門記』、『尾張国郡司百姓等解文』、『仲文章』等が、ともに同じ文化環境、学問環境を基盤にして成立したことを明らかにし、こうした諸テキストの文学史上、文化史上の重要性にも論及した。また、『大塔物語』は、応永七年(1400)に信濃国で起こった、守護の小笠原長秀と「国一揆」の人々との戦い、信州大塔合戦を記した室町時代中期の真名表記テキストであるが、『大塔物語』試論（『中世文学』第52号、2007年6月）と題する論文で、この『大塔物語』の記述が、室町期の真名表記をめぐる高度な文化環境、学問環境に支えられていることを明らかにした。

そして、この『将門記』、『大塔物語』という二つの真名表記テキストに注目する中で見出されたのが、用字、用語、修辞、文体、思想等にわたる、両者の記述の多様な類似、類同である。数百年もの時を隔てて成立したこの二作品の間には直接の影響関係はない。また、この二作品は、いずれも軍記物語というジャンルに属すると目されてはいるものの、そうしたジャンルの一致が記述上の多様な類似、類同をもたらしているわけではない。この二書の記述に幅広い類似、類同が認められるのは、両者がともに特徴ある漢語、用字を駆使した和製の真名表記テキストであることによるものと考えざるを得ない。古代から中世までの数百年もの間に幅広く世に受け継がれてきた表現と知の系脈があったことを想定し、その解明を志すに至った理由がそこにある。

このように、『将門記』と『大塔物語』という二つの真名表記テキストの記述に類似、類同が見出されることを重要な端緒として、平安時代から室町時代に至る数多くの真名表記テキストの記述を対象にした考察を始めることとなった。めざしたのは、従来看過

されてきた真名表記をめぐるレトリックとリテラシーの系脈を捉え出すことである。そうした表現と知の系脈を明らかにすることで、日本の表現史、文学史、リテラシー史を捉え直そうと考えたのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、先述のとおり、古代から中世に至る数百年もの間、日本の文学、文化、学問の基底を支え続けてきた、真名表記をめぐる表現と知の系脈を明らかにすることにある。が、より具体的には、次のような三つの目的を立て、それぞれを段階的に、また、複合的に組み合わせる中で、この大きな目的に到達することをめざした。

(1) 『大塔物語』を、本研究の最重要の定点と目し、その記述の細部に立ち入り、注釈的な考究を精緻に進める中で、真名表記をめぐる表現と知の実態を徹視的に解き明かすことをめざす。

(2) 真名表記をめぐる表現と知の系脈の実態を、日本の文学史、文化史における他のリテラシーとの比較を通して、巨視的に解き明かすことをめざす。

(3) 上記の徹視的な考究と巨視的な考究との接合を図る中で、真名表記をめぐる表現と知の系脈を、いっそう明確に捉え出すことをめざす。

3. 研究の方法

上記のように、目的を三つに系統化したのに合わせて、方法もそれぞれに対応するよう三つに系統化し、研究を実施した。

(1) 真名表記をめぐる表現と知の実態を徹視的に明らかにするという目的に合わせて、『大塔物語』の記述を、その細部に立ち入って精緻に捉えるべく、注釈的な考究を推し進めた。それは、次のような多岐にわたる考証を組み合わせたものである。

- ① 『大塔物語』の現存伝本（嘉永四年版本）の成り立ちについての考証
- ② 『大塔物語』の現存伝本の本文の翻刻
- ③ その翻刻した本文の訓読
- ④ 用語の意味の考証と全文の口語訳
- ⑤ 表現の修辞の考証
- ⑥ 用語、表現の典拠、原拠の考証
- ⑦ 用語、表現に関する他書との類似、類同の考証
- ⑧ 本文に現れる地名についての考証
- ⑨ 本文に現れる人物、氏族についての考証

このような徹視的な考証は、『大塔物語』という真名表記テキストの記述を支えた表現と知のネットワークがいかなるものであったのかを明らかにするためのものであり、参看したテキストは、室町時代の真名表記テキストの『桂川地蔵記』、『文正記』や、平安時代の真名表記テキストの『将門記』、『尾張

国郡司百姓等解文』、『仲文章』はもとより、漢詩文、古辞書、往来物、軍記物語、鷹書、和歌、歌学書、言談、注釈、謡曲、能楽伝書等、幅広い分野の数多くの文献にわたった。また、文学、文化、歴史にかかわる研究書、論文や辞書、辞典、さらには、長野県の自治体史等からも多大な知見を得ることができた。

(2) 真名表記をめぐる表現と知の系脈の実態を巨視的に捉えるという目的に合わせ、日本の文学、文化、学問を支えた他のリテラシーをも展望し、それとの比較の中で、『将門記』、『大塔物語』等の記述を支えた知と表現の特徴や意義を明らかにすべく、考察を進めた。そこでは、特に、『陸奥話記』や、『本朝麗藻』所収の作品等が、『将門記』、『大塔物語』とは異質の漢詩文であることに注目し、その意味について考究した。また、同じく十、十一世紀に成立しながら、『将門記』、『尾張国郡司百姓等解文』、『仲文章』と、『源氏物語』等の和文の物語との間に接点や類似点が見出せないことも重要な問題と捉え、互いが没交渉であることに関する文学史的な意味を考察した。加えて、古代から中世に至る文学史、文化史の枠を越えて、近世の文化史、文化史への連続をも幅広く展望できるような視点や知見も得られるよう努めた。

(3) 上記の微視的な考究と巨視的な考究とを組み合わせるために、微視的な考証を行う時には、巨視的な展望を見失わないよう、巨視的な考察を進める時には、可能な限り、微視的な検証を組み入れるよう心掛けた。こうした複眼的な考究を通して、真名表記をめぐるレトリックとリテラシーの本質を解き明かすことをめざした。

4. 研究成果

上記のように三つに系統化した目的と方法に見合う形で、次のような成果を得ることができた。

(1) 『大塔物語』の記述を注釈的に考証する微視的な考究については、本研究の四年間の期間全般にわたって、それを継続したが、当初の予定どおり、『大塔物語』の現存伝本の成立の理解、本文の翻刻、訓読、語釈、通釈、記述の修辞、典拠、原拠の考証、他書との類同の考究、地名、人物、氏族の考証等を幅広く詳細に行うことができた。こうした微視的な考証によって得られた知見は実に膨大で、その成果の多くは、本研究の報告書として2013年3月に刊行した『『大塔物語』をめぐる知の系脈』と題する全204頁(A4版)の書に盛り込んで公表した。特に、この報告書にも記したが、『大塔物語』全文の注釈を行うことで、このテキストの記述が在地に根ざした知識やものの見方を内包していることを明示できたのは、大きな収穫であった。

たとえば、この物語には、多くの武士の名、多くの氏族の名が現れるが、その一つ一つの名の現れ方、並び方に、信濃の山と川が作り上げた地勢の力学が現れている。こうした記述の在地性も、『大塔物語』が、真名表記テキストであるからこそ有するに至ったものと考えられる。『大塔物語』の記述を支える知は、リテラシーとレトリックだけではなく、世界の見え方、捉え方をも規定し、在地に根ざしてものを見る姿勢それ自体もテキストに付与しているのである。が、その一方で、『大塔物語』は、真名表記をめぐる知に支えられていることで、事の様態や人の行動、心情を誇張して表現するというレトリックを本質的に具えるに至っている。こうした『大塔物語』の二面性も、微視的な注釈を通して精細に理解できたことである。この在地に根ざしつつ、また一方で、事実を離れるという、真名表記テキストであるがゆえの『大塔物語』の重要な特質については、先述の報告書『『大塔物語』をめぐる知の系脈』の中でも論述した。なお、『大塔物語』の全文について、それを嘉永四年版本から翻刻し、訓読し、口語訳し、注釈するというのは、この報告書が初めてなしたことである。その意味では、『大塔物語』を身近な歴史叙述として意識する、長野県に縁のある方々にとっても、本書の発行は有意義であったと考えられる。この報告書は、研究者や国立図書館、大学の図書館だけではなく、県立長野図書館や長野県の市町村の図書館にも送った。『大塔物語』の注釈書、解説書として、広く活用していただけるものと信じている。

(2) このように、『大塔物語』の記述の微視的な注釈とその成果の発表を行う一方で、日本の文学史、文化史、学問史の中で、真名表記をめぐる知の系脈を位置づけるという巨視的な考究を、本研究の二年目の2010年度から本格的に進めた。そうした考察を深めるうちに、本研究で注目する表現と知の系脈が、「吏の漢学」とも、「往来物の漢学」とも称すべきものであることが明らかになった。従来、平安時代以降の日本の学として重視されてきたのは、仮名の歌文のリテラシーと博士の漢学であったが、それに、この吏の漢学・往来物の漢学を加えた、三つの表現と知の系脈が、日本の文学史、文化史、学問史を支えてきたことがわかってきたのである。平安時代の吏の漢学を支えられて生まれ、流通した『将門記』、『尾張国郡司百姓等解文』、『仲文章』は、平安時代の代表的な文学として遇されることのないまま、平安文化の周縁部に位置づけられてしまっているが、そのような見方を離れ、新たな日本文学史、日本文化史を構想するためにも、吏の漢学に注目する必要がある。中世の往来物の漢学は平安時代の吏の漢学を継承するものであるが、その往来

物の漢学も、これに支えられて成立した『大塔物語』も、新たに重要視して行く必要がある。こうした問題に関する考究を幅広くまとめて提示したのが、論文「リテラシーの動態を捉える文学史は可能か」(『文学・語学』第200号、2011年7月)である。この論考は、本研究における巨視的な考究の一つの成果として、日本文学史の新たな展望と構想を提言したものである。また、『天正記』の機構と十六世紀末の文化・社会の動態」と題する口頭発表も、真名表記をめぐる表現と知の系脈を巨視的に考察した成果である。これは、2012年6月24日に、立教大学で開催された2012年度説話文学学会大会シンポジウム第三セッション「説話と地域・歴史叙述—転換期の言説と社会—」での報告であるが、十六世紀末に、大村由己が天正年間の豊臣秀吉の事跡を記した『天正記』と総称されるテキスト群のうちの、「播州御征伐之事」、「惟任退治」、「柴田退治」、「紀州御発向之事」、「四国御発向并北国御動座事」、「任官之記」という、六つの真名表記テキストについて、その文化的意味を論じた(なお、当該発表の内容は、2013年夏に、笠間書院から刊行される、説話文学学会編『説話から世界をどう解き明かすのか』に収録される予定である)。この真名表記テキストの記述は、滑らかな流通を可能にする均質な世界の拡大が秀吉によってもたらされることを書きとめ、寿ぐという内容で、『将門記』、『大塔物語』、『文正記』といった従来の真名表記テキストの記述とは明らかに異質なものであるが、そうした真名表記テキストの性格の変移は、古代・中世から近世へと至る社会、文化の変容を尖鋭に示していると考えられる。吏の漢学・往来物の漢学が、都とそれ以外の地域の別や、官位の別を超える脱領域的な機能を本性として保ち続ける中で、日本における都鄙観念や公共性の意識が変化し、その変化によって、吏の漢学・往来物の漢学の発現のあり方が異なったものと理解できる。本研究は、「古代から中世に至る真名表記テキストに関する表現と知の系脈についての研究」と題するとおり、スタート時には、中世を超えて、近世の文学、文化、学問をも考えるという構想を十分に具えていなかったが、『天正記』の真名表記テキストに着目し、その特質を考察する機会を持ったことで、真名表記をめぐる表現と知を、古代、中世の範囲を超えて、近世の文化、社会につながる問題として捉える新たな展望を開くことができた。これも、本研究の重要な成果であると考えている。

(3) こうした巨視的な考察と、先述の微視的な注釈との接合は、報告書『『大塔物語』をめぐる知の系脈』(前掲)を作成する過程で本格的に進行した。この報告書が『大塔物語』の記述の微視的な注釈を盛り込んだもの

であることは、先に記したとおりであるが、その注釈をまとめる過程で、微視的な考究と巨視的な考究とが結び合う機会が幾度も訪れ、その都度、新たな展望や新たな思考の深化を得ることができた。たとえば、先にも言及したとおり、微視的な注釈を突き詰める中で、『大塔物語』の記述が在地に根ざした知識やものの見方を含んでいることを理解することができたが、それを広い視野から捉え直すと、同様の性格が、『将門記』にも、真名本『曾我物語』にも、『源平闘諍録』(『平家物語』の一異本)にも見出されることがわかってくる。『大塔物語』のような在地的性格を具えた書は珍しいが、それが揃って真名表記テキストであることは大いに注目すべきである。これらの書は、いずれも、在地に根ざした視点から、地勢による人間関係の系脈と、血縁にもとづく人間関係の系脈を詳細に捉え出し記述している。それは、在地に根ざしたものの見方や表現が、真名表記をめぐる知によってもたらされたことをもの語っている。知は、リテラシー(読む力、書く力)やレトリックとともに、イデオロギー(世界の見え方、捉え方)をも内包している。真名表記をめぐる知は、見聞した事実の記述法だけではなく、事実の見え方、捉え方自体が在地に根ざしたものとなるほどの大きな規制力を具えているのである。日本の文学史、文化史、学問史における真名をめぐる知の重要性はそこにある。これも、本研究を進める中で明らかになったことの一つである。このように、本研究の報告書『『大塔物語』をめぐる知の系脈』には、微視的な考究だけではなく、『大塔物語』本文の注釈に巨視的な考究を組み入れた知見も多様に盛り込むことができた。

今後、本研究の成果を新たな基点として、日本の文学史、文化史、学問史をさらに深く幅広く考察し、捉え直して行きたい。

5. 主な発表論文等(研究代表者に下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

佐倉由泰、リテラシーの動態を捉える文学史は可能か、『文学・語学』(全国大学国語国文学会会誌)、査読無(依頼論文)、第200号、2011、pp.54-69

〔学会発表〕(計1件)

佐倉由泰、『天正記』の機構と十六世紀末の文化・社会の動態、2012年度説話文学学会大会(説話文学学会創立五十周年記念大会)シンポジウム第三セッション「説話と地域・歴史叙述—転換期の言説と社会—」、2012年6月24日、立教大学(東京都)

〔図書〕(計1件)

佐倉由泰、出版社なし（科学研究費補助金の報告書として研究代表者が発行した）、『大塔物語』をめぐる知の系脈、2013、204（単著）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐倉 由泰 (SAKURA YOSHIYASU)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：70215680

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし